

カントへのスウェーデンボルグの影響

—『視霊者の夢』と『天界の秘義』を中心にして—

釦持 晃一

日本大学大学院総合社会情報研究科

Influence of Swedenborg on Kant

—Mainly on “Dreams of a Spirit Seer” and “Arcana Coelestia”—

KENMOCHI Koichi

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

Swedenborg's spiritual abilities were the topic of the time when Kant began to investigate on this subject. Kant wrote an explication of Swedenborg's claims in “Dreams of a Spirit Seer.” In this book, Kant criticized Swedenborg's a spiritual ability. With this single publication, Kant struck down Swedenborg's reputability within the German intelligentsia. In addition, Kant described his own ideology about the spiritual world. This early philosophical work shows indications of Kant's latter philosophical ranking. It is commonly thought that Kant drew upon Rousseau's ideology. However, this paper considers not only Rousseau's influence, but also the influence of Swedenborg's “Arcana Coelestia” on the development of Kant's latter philosophy.

1.はじめに

哲学者イマヌエル・カント (Immanuel Kant、1724–1804) は、視霊者 (Geisterseher) と呼称する科学者・哲学者・神学者であるエマヌエル・スウェーデンボルグ (Emanuel Swedenborg、1688–1772) の超常能力を調査している。その調査結果として『形而上学の夢によって解明された視霊者の夢』¹ (以下『視霊者の夢』という) を出版している。

この著作の中で、カントはスウェーデンボルグを「夢想家の中で最高の夢想家 (Erzphantast)」(354)²と揶揄して一掃し、「彼の大著は空で理性の一滴も含んでいない」(360)などと完膚なきまでに否定し精神病院行きを宣告した。このスウェーデンボルグへの一撃は、致命的打撃であり、その後ドイツの学界ではスウェーデンボルグは真面目に取り上げられなくなった³という。このようなドイツの状況がそのまま日本に流入し、当然のことながら大哲学者カントが否定したということで、日本の学界もドイツの学界と同じ状況となり、スウェーデンボルグは日本の思想界でも取り上げられないという状況である。

カントは『視霊者の夢』の中で、霊界について大胆な描写を試みている。この論述部分は、研究者によると『視霊者の夢』の中でも最も重要な核心の位置を占めるものと捉えられ、この核心部分の描写は、ジャン＝ジャック・ルソー (Jean-Jacques Rousseau、1712–1778) による思想的影響が大きいとされている。⁴だが、カントは『視霊者の夢』の中で、

「我々はスウェーデンボルグの著作の中に、最初の外見が瞥見させる以上に怜悯と真理とを推測しなくてはならないか、そうでなければ、彼が私の体系と一致するのは、ただ偶然にそうなるに過ぎない」(359)

と述べ、カント自身の霊界に関する論述がスウェーデンボルグの霊界の思想に一致していることを告白している。この告白に照らせば、カントの霊界描写はルソーの影響だけによるものとはいえないだろう。

一方、ハインツ・ハイムゼート (Heinz Heimsoeth、1886–1975) によると、

「自然科学で陶冶され自然哲学で方向を定めた形而上学者としてのカントから、彼のうちにより深

くより根源的に潜んでいた生への関心と精神的世界への関心が表立ってくるにつれて、それまでの考え方が、最初はゆっくりとではあったが、変化していった。彼が外から受けとった大きな刺激としては、ルソーとスウェーデンボルグの名を挙げることができよう」⁵

と述べ、カントが批判期以前に影響を受けた人物として、人間としての生への関心を開かされたルソーと形而上学的な精神的世界を開かされたスウェーデンボルグを挙げている。

ハイムゼートも指摘するように、カント批判期への萌芽的論述である『視霊者の夢』の中での霊界描写は、ルソーだけではなくスウェーデンボルグの思想的影響を深く受けていることを本論稿で考察する。

2.カントの霊界譚への関心

2.1 スウェーデンボルグからの衝撃

カントは、1766年の『視霊者の夢』出版前の1763年に、家庭教師をしていたクノープロッホ嬢宛てに当時巷で話題になっているスウェーデンボルグによる霊界のさまざまな現象や超常能力に関する調査の中間報告を手紙で行っている。

この書簡の中でカントは、「私には不可思議な事柄へと傾く気質や容易に信じ込まされてしまう弱さが少しばかりあると、どなたかお気づきになることがあったかどうか、それは私にはわかりません」⁶と自らが霊界に関するさまざまな現象に惹かれていることを告白している。

だが、霊界に関するさまざまな現象に対して、「それを否定する側に向かうことこそが健全な理性の規則にもっともふさわしいことだと考えてきました」⁷と述べ、これは、霊界に関するさまざまな現象は、「総じて十分に証明されていない」⁸のだから理解不可能であり、客観的に証明もできず、さらには経験することもできない事象であるために、空疎な議論や興味本位の問い合わせなどの厄介なことに巻き込まれたくもないので敢えて関わることをしなかったということである。

ここでのカントによる表現は、否定する側が理性にふさわしいと「考えてきました」と過去の心情を告白するという形式になっており、今まで霊界に関

するさまざまな現象は、理性にとって理解不可能であり、厄介なことに巻き込まれるのが嫌だったので関わりを避けていたが、それも「スウェーデンボルグ氏の物語を知る」⁹までのことであると告白している。

カントにとって、スウェーデンボルグとの出会いは、これまでの考えや態度を覆してしまうほどの衝撃的な影響を及ぼしたということになる。それまでのカントの態度は、健全な理性の立場に立って、数多くの霊界不可思議譚や心霊現象などといったものに心を動かされることのなかった状態であったが、スウェーデンボルグとの出会いはいささか違ったようであった。

そもそもクノープロッホ嬢宛ての書簡は、同嬢の依頼に応じて、スウェーデンボルグのさまざまな不可思議な事跡を報告するという形をとっているのだが、その報告のための調査の方法は、到底義理の頼まれ仕事ではなく、カント自身の心の受けた衝撃の大きさを念頭に置くことなしには理解し難い状態である。具体的には、知人や友人と何度も手紙のやり取りをし、さらにはスウェーデンボルグに手紙を送り、友人に何度も実地調査を依頼するといった異常ともいえるほどの熱心さである。¹⁰このような行動を取らせたということからもカントの衝撃の大きさを窺い知ることができる。

この調査の過程の中で、カントは、スウェーデンボルグを憧憬するようなあるいは胸が高鳴るような良い報告を友人や知人から受けていたが、その知らせの実現は終に起こらなかった。そのため、カントは、スウェーデンボルグに対する満足な資料を得られることなく、仕方なく入手可能なスウェーデンボルグの宗教的著作の初期の作品である『天界の秘義 (Arcana Coelestia)』を取り寄せ購入し読んだのである。このような状況下でカントは『視霊者の夢』を数年後に出版している。

2.2 『視霊者の夢』の執筆理由

1766年に、カントは『視霊者の夢』を出版後モーゼス・メンデルスゾーン (Moses Mendelssohn, 1729-1786) 宛ての書簡の中で、「あなたのもとに郵便馬車便で『夢想話』を数部送りました」¹¹と述べ、一

部を手許に取ったのち残りを「宮廷説教師ザック氏」他に渡すように依頼している。この書簡で、『視霊者の夢』は、「無理やり書かされた著作」¹²であるとして、カント自身が自ら望んで構想し著したのではなく、外部からの強い要請によって仕方なく書かされたのだという。

クノープロッホ嬢宛ての書簡で、スウェーデンボルグの物語は、カントにとって人生を揺るがすほどの強い衝撃を受け、その物語の調査も義理の頼まれ仕事ではなく、いつの間にか自発的調査の観を拭いきれない状態に変化していた。だが、メンデルスゾーン宛ての書簡では、周りが書け書けとしつこくうるさいので、仕方なく書いたんだとあっさりした表現になっている。

2ヵ月後のメンデルスゾーン宛ての書簡では、『視霊者の夢』の執筆理由を、

「私はかつて、スウェーデンボルグの幻視について、彼と直接知り合いになる機会があった人々に出過ぎた問い合わせをしたり、幾度かの手紙のやり取りをしたり、そしてついには彼の著作を取り寄せるまでにいたりしましたために、何かと世間の話題になってしまい、その結果、私は、自分はこれらの奇談すべてについてよく知っていると思われており、その知識にケリをつけないうちは、ひっきりなしの問い合わせから解放されることはない」¹³

と述べ、頼まれ仕事であったが、夢中になって調査をしていたら、いつの間にか世間の人々の目につき過ぎ、スウェーデンボルグ研究の当代の第一人者という地位を与えられてしまった。このような厄介な役割から解放されたくて、一つの区切りをつけるために、書きたくはなかったが不本意ながら書かざるを得なかったということである。

上記の状況から脱するためには、スウェーデンボルグを「否定」し関わりを断絶することしか残されていなかったようである。

また、同書簡では、

「私には、世間の嘲笑にさらされることもなく自分の考えを表現する方法を編み出すことがむずかしくなりました。それゆえ、他の何よりも先に、まず自分で自分を笑い物にしておくのが最も得策

であるように思われました」¹⁴と述べ、このようなアイロニカルな態度をとっている。

ここから推測すると、カントの周辺状況は彼自身が崖っぷちに追い込まれるほどのものだったのか。スウェーデンボルグを否定したのなら調査したカント自身も自己否定しなければ事柄全体が治まらないということなのか。だが、『視霊者の夢』で、スウェーデンボルグを否定し、カント自身を嘲笑的にしたことによって、厄介な役割から解放され、カントは学問の構想を得て批判哲学構築の道へと邁進できたということになる。

2.3 伝統的形而上学者の夢

カントは、メンデルスゾーン宛ての書簡で、『視霊者の夢』執筆当時の自身の焦点の定まらない「ばかばかしい」ほどの心の状態に触れている。

「その説話に関しては、そこにつじつまの合わない点があつて、そのためその価値がだいなしになるにもかかわらず、この種の物語に対するちょっとした愛着を抱かずにはいられず、さらにまた、その理性根拠に関しては、そこには妄想の産物と理解不可能な概念とがあつて、そのためその価値がだいなしになるにもかかわらず、それが正しいのではないかという推測を抱かずにはいられない」¹⁵

カントは、スウェーデンボルグの物語に対して、客観的な事柄として経験できないのだから、理性では認識できないのに否定もできず、さりとて、霊界物語に愛着の傾向性を有しているが、理性を否定する物語ゆえに肯定もできずといった、どっちつかずの曖昧な状況に晒されていた心の動揺を告白している。

カントがスウェーデンボルグの物語に愛着を待つわけは、

「とりわけ最近になって形而上学の本性と人間の諸認識のなかにおける形而上学の固有の位置を理解したと思うようになったとき以来、人類の真正にして永続的な幸福でさえ形而上学にかかっていると確信している」¹⁶

と述べ、形而上学に対して熱心な期待を寄せている

からである。

しかし、眼前には伝統的形而上学の冗舌や愚かしい小細工が横行している状況には、

「このごろ世間に広まっているこの種の見解をつめこんだ書物すべてがもっている高慢で思い上がった態度を見て、嫌悪感、いやそれどころか些かの憎悪の念を抱いていることを私はけっして隠しはいたしません」¹⁷

と伝統的形而上学に対して攻撃的なまでの心情を告白する。スウェーデンボルグに対しては、その物語に愛着を感じるとして、形而上学の重要な洞察に達する契機となったようであるが、その影響なのか伝統的形而上学にますます叛旗を高々と上げる心情に到ったようである。

カントは、霊的なことを「アприオリな理性判断によって発見することが可能なかどうか」¹⁸について、また、「生誕、生、死は我々の理性によっていつか洞察できるようになるものかどうか」¹⁹は、経験として与えられることができるかどうかで判明するのではないかという。経験によっては認識できないのが霊的なことであり、この存在を証明することも、それを否定することの証明もできない。それゆえにカントは、

「誰かがスウェーデンボルグの夢想話の可能性を攻撃したときに、私はその夢想話そのものをあえて擁護した」²⁰

と述べ、やはりスウェーデンボルグの物語には愛着を持っていたのである。

このようなことから、『視霊者の夢』は伝統的な形而上学者の夢を断罪するのが狙いなのではないか。スウェーデンボルグの物語に対しては、普遍的に経験できないのだから、カントの置かれた周辺状況からは一旦否定せざるを得ず、さらには、カント自身をも生贄として差し出さなければ、周囲の状況から解放されないという切羽詰まった事態であったのだろう。スウェーデンボルグの霊界物語によって形而上学の重要な洞察を得たカントは、その洞察を懐に抱きつつ『視霊者の夢』の中で、伝統的形而上学者の夢に一撃を浴びせたのではないのか。

3.カントの霊界描写

3.1 『視霊者の夢』と『天界の秘義』

クノープロッホ嬢及びメンデルスゾーン宛て書簡の背景で執筆された『視霊者の夢』の構成を見てみると、短い前置きの後に形而上学による靈魂の理論と形而上学の夢を述べる第一部「独断編」と、その理論を手引きとしてスウェーデンボルグの事跡と理論を紹介する第二部「歴史編」からなり、各部の末尾に「第一部の考察全体からの理論的結論」と「本書全体の実践的結論」がそれぞれと全体の総括をなすという体裁をとって構成されている。

この書全体を統一する役目を果たす概念は「夢」である。その「夢」とは、形而上学の理論による「夢」、視霊者による「夢」、そして何よりも中心となるのはカント自身による形而上学の「夢」である。このようにこの著作は「夢」という概念によって全体的に覆われている。夢は意識でありつつ現実の対象を持たず、それでも意識であることには変わりがないという意味で、二義的なものの典型であり、この二義性ということもこの著作の特性である。²¹

次にカントも購入し読んだという『天界の秘義』とはどのような著作かを見ておきたい。『天界の秘義』は1749年から56年にかけてロンドンで出版され、四つ折版で全8巻からなる著作であり、スウェーデンボルグにとっては最初の宗教的著作となる。ちなみに日本語版は英語訳されたものから邦訳され全28巻という大著である。この著作は聖書の「創世記」と「出エジプト記」の霊的な意味を逐語的に解明する釈義書の形式を取った、霊的観点からの新解釈が記されている。この聖書の新解釈としての内的意味（霊的意味）の説明の部分と、各章の前後にスウェーデンボルグが霊界で目撃した驚くべき事柄が記録され、本編と付録で全体が構成されている。²²

カントは『視霊者の夢』の第二部第二章「霊界を行く一狂信家の忘我的旅行」の中で、

「ただ聞いたことと見たことすなわち彼自身の眼で見、そして彼自身の耳で聞いたとされることだけが、われわれが特に諸章への付録から引き出そうと思う一切である。なぜかと言えば、それらがすべての他の夢想の根底に存し、かつまたわれわれが上の個所で形而上学という風船に乗ってあえ

て行った冒険にかなり関係がありもするからである」(360)

と述べ『天界の秘義』の中でのスウェーデンボルグが見聞きした霊界の記述だけに焦点を絞りダイジェストを紹介している。ただし、カントは、

「感官の妄想を知力の妄想から分離して、彼が彼の幻想のもとに立ち留まらずに、背理的な仕方でもこじつけたようなことを省略する。」(361)

と述べ、スウェーデンボルグの知的な霊的部分、すなわち霊的な法則による思想部分は省略している。

3.2 伝統的形而上学への反駁

『視霊者の夢』の第一部「独断編」の第一章では、「大学での饒舌」に対して、カント自らの「無知」を対置させ論述を始める。

「大学の方法的饒舌はしばしば、定まらない語義によって、解決し難い問題を回避するための協定に過ぎない。なぜかと言えば、私は知らないという、便利でしかも大部分理性的でもある言葉が、大学では容易に聞かれない」(319)

と述べ、学者達は好んで霊界の諸事情について空想と思弁をたくましくして議論に熱中し、互いに自身の洞察の深さを競い合う。だが、対象となっていることは、経験をすることができない事柄であるために、意見は学者によって様々であり一致を見ることはなく、空しい論戦が延々と繰り返されることとなる。この状況に対しカントは、一般に経験において感官にあらわれることのないものを我々は認識することができないから、超越的な認識不可能の事柄については、きっぱりと「私は知らない」と答えなければならないという。²³

なぜならば、まず、物質的存在者の特性は空間を占有し、延長を有し、不可入的であることであり、可分性と衝突の法則に服している。だが、この物質的存在者の特性から類推的に霊的である非物質的存在者の存在を導き出すことはできない。それゆえに霊的である非物質的存在者は、人間の感官を超えた通常の経験概念では把握することができない事象であることから、まったく認識することができない。したがって、通常の経験概念である常識を足場にしてこそ、適正な理性的判断が可能となるのであると

いう。

従来の伝統的形而上学や学校哲学の中心問題の一つである靈魂論と心身結合の問題は、学者にとっての地位や名誉を守るための詭弁的学問になっており、純粋に学問探究しようとする態度ではなく、これを放置したならば妄想と誤謬を限りなく増大させるにちがいない。この誤った方向をカントは正そうとしていたのである。学者達がこのような状況にあっても、カント自身は形而上学に対して「人類の真正にして永続的な幸福でさえ形而上学にかかっていると確信している」²⁴と純粋に期待を込めている。これはカント自身の形而上学の「夢」に対する期待なのかもしれない。

『視霊者の夢』の中でも形而上学への期待からなのか、

「私は世界における非物質的存在者の現存在を主張し、私の魂そのものをこれらの存在者の部類に入れることに大いに傾いていること」(327)

を告白している。この告白を注釈してカントは、

「世界において生命の原理を含むものは、非物質的本性のものと思われる。なぜなら、一切の生命は、自己自身を意志通りに規定する内的能力に基づいているからである。……それ自身の選択意志が自分を自分で規定しかつ変化させる能力のある本性のものは、多分物質的本性では有り得ない」(327)

と述べ、人間の活力の源泉を霊的存在者に求め、カント自身の形而上学の「夢」を垣間見させる説明を行っている。

伝統的形而上学の理論に嫌悪感を抱くカントは、その伝統的形而上学を正そうとして、カント自身の形而上学の理論を第二章で披露している。そこでの考察はまず物質と霊との関係についての論述から始まる。

3.3 カントの霊的世界

霊界に強い関心を示すカントは、非物質的存在者である霊の存在を認めるとともに、生命の実質は物質ではなく霊が生命の根源ではないのかとの認識に傾いている。

まずカントは、数学的機械論的な物理的説明を許

す世界空間を充たしている死せる物質に対して、その死せる物質だけでは生命現象が説明できないことから、自然の死せる素材（物体）を動かす生命の根拠としての非物質的存在者について、論証の判明性でなくとも、少なくとも未熟練ではない悟性の予感をもって、その存在を納得し想定することができる。この非物質的存在者の作用法則は「靈的」と呼ばれ、それが物質的世界における物体と結び付くとき「有機的」と名づけられるという。

ここからカントは、

「非物質的存在者は自己活動的であり、したがって実体であり、それ自身で存立する本性のものであるから、最初に出会う帰結は、それらの存在者は相互に、統合されると、恐らく一つの大きな全体を形作る」(329)

といい、その全体を「非物質的世界（叡知界）」と呼ばれる、靈的法則による世界を想定する。この非物質的世界は物質的世界から独立して存在するものであるとカントはいう。

ここから物質的世界である自然界と非物質的世界である叡知界（靈界）の二元的世界の構想がカントの思想に登場してくる。この二元的世界は『人倫の形而上学の基礎づけ』や『実践理性批判』で論じられている「感性界（mundus sensibilis）」と「叡知界（mundus intelligibilis）」の二元論の思想や共同体としての理想の国家である「目的の国」の構想へと導かれる。すなわち道德的世界（靈的世界）の構想へと繋がる論述である。

このようにしてカントは、物質的世界とはまったく異種の非物質的世界を想定し、それぞれ独立した両世界の偶然的結合が成されるわけであるが、この偶然的結合よりは非物質的世界の中での靈と靈の「相互の間に相互的結合と交互作用の関係」の方が自然であるという。(329)

また、非物質的世界の存在者は、物体としての死せる素材に生命を与える活動的本性そのものであるとしても、この活動的本性がどれほど物体へ影響するのか、活動的本性と物体との結合の度合いも未知であるといい、これらの疑問はいつまで経っても判明にはならないという。(329) よって身体と靈の交互的結合の不可解さの方が謎であると指摘する。さ

らにカントは世間の生命に対する考え方が物活論や唯物論の両極端に片寄ることを戒めている。

靈と身体との結合や交互作用は判明ではないが、カントは、

「人間の魂はそれゆえすでにこの世において、同時に二つの世界と結びついているものとみなされなくてはならないであろう、それらの世界の中で、魂は身体と結合して人格的統一体となっている間は、物質的世界だけを明瞭に感覚する、それに反して、靈界の一成員として非物質的本性の純粋な影響を授受し、その結果、かの身体との結合がなくなるや否や、魂が常に靈的本性との間に結んでいる交互関係だけが残り、そしてそれが魂の意識の明晰な直観にそれ自らを開示するに違いないであろう」(332)

と想定する。

ここでの二つの世界とは自然界と靈界ということであり、人間は魂と身体で人格となり、自然界の間は靈界のことは意識できないが常に靈界には繋がっている。死んで魂だけになったら靈として次の生活の場である靈界のことが現実的な実感をもってはっきりと見えてくるということである。

カントは魂と身体との交互交流は不可解だとして、どのような結合なのかは論述していない。これについては、スウェーデンボルグも詳しくは論じていない。ただ、カントは、靈界の存在と靈界における生命の根源である靈と靈の交互関係は論証されたも同然だと主張する。ここから、

「われわれが表象するような体系的な靈界の組織が、ただ単に、余りにも仮説的な靈的本性一般の概念からだけでなく、現実的であって一般的に承認された何らかの観察から推論されるか、もしくは蓋然的に過ぎなくとも推測されるならば、結構であろう。」(333)

と述べ、靈的法則による道德的世界（靈的世界）の描写を開始する。²⁵

3.4 カントの靈的法則による道德的世界

カントによると、人間の心は常に内部で私利私欲などに対する葛藤をしているという。その葛藤とは、自己の内部に執着する「利己心(Eigennützigkeit)」と

自己の外部を指向する「公共心(Gemeinnützigkeit)」である。これらが人間の心情を動かす二大要因であり、それぞれ反対の方向を向いており、それぞれを動因として引き合いが起こり二つの力の葛藤が生じるといふ。利己心はつねに私の利益のみを思うのに対して、公共心は他者の利益を思い自己を犠牲にしてでも万人の上に思いを及ぼすこととなる。この公共心は、

「自分自身で善もしくは真と認識したことを、他人の判断と比較して、両者を一致させ、同様に各人の魂が、われわれの歩んだ道とは別の道を歩いているように思われるときには、その魂を認識途上でいわば停止させる。」(334)

というある力が働くこと述べ、他人の是認や賛同を求めずにはおれない傾向や他人の幸福を願い求めずにはいられない気持ちにあらわれるという。この傾向は「ある隠れた力に強いられて」(334)、自分の意志に反してしぶしぶ生じることであるが、その自分のでない意志の働きによって「思考する存在者の全体に一種の理性統一を与えるための手段」(334)となり、そこに道徳的誘因の働きを見ることができるといふ。

この道徳的誘因は「強い責任の法則と比較的弱い親切の法則」(334)として我々人間の心を支配し、これらの法則は「我々に少なからざる犠牲を強要し、両法則とも時折利己的な傾向性によって圧倒されることがあるにしても、人間性のいづくにおいてもかかる法則をあらわさずにはいない」(335)という普遍的な統制力を持っている。この傾向によって我々人間の心は、「一般的意志の規則に依存することを知り、そしてそこからすべての思考的本性の世界の中に、単に靈的法則による道徳的統一と体系的組織が生ずる」(335)。この一般的意志と合致するように我々人間の意志を強要する感じは「道徳感情」であるという。

これは、人間の心には靈的法則の作用が影響し、道徳的誘因によって自己よりも他者への配慮が働くように仕向けられ、道徳感情によって理性統一が成されるということである。この現象を自然界におけるニュートンの運動法則と万有引力の法則を引き合いに出し、引力と重力は目に見えず触れることもで

きないが、万有引力の法則によって自然界が整然たる秩序正しさを示しているように、

「道徳感情は一般的意志に対する私的意志のこの感じられた依存性であることになり、また非物質的世界がそれによってその道徳的統一を獲得するところの、自然的かつ一般的な相互作用の結果である」(335)

と述べ、私的意志と一般的意志は靈的法則によって、秩序正しい道徳的統一により靈界を構成するということである。

ここから、身体と魂との結合から脱した靈としての靈的世界では「真の意図や、無力のために実を結ばぬ多くの努力の中に潜む動機や、自己自身に勝つことや、あるいはみかけだけのよい行為の中に隠れた悪意など」(336)の心意は、自然界では隠すことができ他者には認識されないが、その心意にふさわしい結果をもたらすということである。

このような結果から、「人間の魂はすでにこの世において、道徳的状态に従って宇宙の靈的実体の間にその位置を占めなくてはならぬ」(336)のである。自然界での人間の魂の状態は、靈的法則に従った道徳性の根拠からみると「善い魂は善い靈と、悪しき魂は悪しき靈と比較的密接な交互関係が生じ」(336)ているということが導かれる。

このようなことから「あの世の生活は、魂がすでにこの世においてあの世との間にもっていたような結合の当然の継続に過ぎない」(336)。自然界での道徳的行いが靈的法則の及ぼす影響によって靈界での生活に再現されるという。このカントによる靈界の記述は道徳的色彩が濃厚に示されており、道徳的世界(靈的世界)の構想を描いている。

次にスウェーデンボルグの『天界の秘義』の各章の間に付録として記された靈界の見聞録を見てみたい。²⁶

4.形而上学と靈的世界

4.1 『天界の秘義』における靈界見聞録

カントは、スウェーデンボルグの『天界の秘義』の「諸章への付録」を丹念に読み、その中から「スウェーデンボルグが彼の幻想のもとに立ち留まらずに、背理的な仕方でこじつけたような」(361)記述

を除き、「スウェーデンボルグ自身の目で見、そして彼自身の耳で聞いたとされることだけ」(360)に絞り、第二部「歴史編」の第二章において、そのダイジェストを紹介している。

なお、『天界の秘義』の「諸章への付録」に対してカント自身の思想との類似性についてカント自ら、

「スウェーデンボルグの著作の中に、最初の外見が瞥見させる以上の怜悯と真理とを推測しなくてはならないのか、そうでなければ、彼が私の体系と一致するのは、ただ偶然にそうなるに過ぎない」(359)

「その中には、類似の対象に関する理性の最も精細な思弁が考えだすことのできるようなこととの、非常に驚くべき一致が優勢である」(360)

と述べ、スウェーデンボルグの思想との一致を自ら告白する。そこで、カントには背理的な仕方でこじつけたとして、除外されたと推定される内容が述べられている、スウェーデンボルグの『天界の秘義』の「諸章への付録」から、カントの霊的法則による道徳的世界（霊的世界）の記述に係わりがありそうな箇所を拾い集め直接見てみたい。

まず幸福について、スウェーデンボルグは、

「この世では、権力者は権力を使って最大の幸福を求め、金持ちは財産を使って最大の幸福を求めます。しかし天界では、最大な者になるために最小の者になりたいと願っているわけではありません。それでは最大になることを憧れ求めているのと違います。むしろ自分よりも他の人たちの幸福を願い、彼らの幸福のために、彼らに仕えることを願っています。目的は自分にはなく、愛から発する行いにあります。」²⁷

「自分のために他人の幸福を願っても、誰もが自分のためなら、幸福になれません。……天界的な幸福とは、役立ちの中で、役立ちに根ざし、愛と仁愛の善にしたがって生活することです。」²⁸

と述べている。自然界と霊界（天界）での幸福の動因の違いも述べており、私利私欲の利己心からではなく目的を他人においた利他心として、自分よりも他人に対する役立ちの実行による活動的な生活が幸福感をもたらすという。さらには、他人を自分以上に愛するところに幸福感の充実があるという。

自然界の人間と霊界の霊との関係について、スウェーデンボルグは、

「人の靈魂は、霊や天使たちのいずれかの社会に、たえず結ばれています。霊や天使たちもまた、それぞれの<いのち>の天性や状態に応じて、主のみ国における場をもっています。地球上の隔てをつくる距離は存在しません。たとえ何千キロ離れていても、同一の社会にいます。仁愛の中に生きている者は、一定の天使的社会に在ることになります。憎悪やそれに似た考えを持つ者は、一定の地獄にいます。反面、何百何千キロと離れた人でも、内的意味の眼をもって現れるとき、その場に応じ、その中の誰かが触れられるほど近くにいます。」²⁹と述べている。自然界で大勢の者が一堂に会しても人の靈魂は意識していないが心の状態によって、それぞれ違う霊界の社会にいつも繋がっており、交流が行われている。これは自然界も霊界も神の摂理や秩序の下に統治されているからであるという。

スウェーデンボルグは、人は心の状態によって、自然界に生活しているときも天界または地獄に繋がっているため、霊界でも自然界での繋がりの継続として天界または地獄の社会に引き付けられるという。では、その社会の選択に人の自由はあるのだろうか。

この自由について、スウェーデンボルグは、

「自由とは、すべてある種の愛や喜びに合致することであり、不自由とは、それに反することです。自己愛、世間愛、またその欲望に合致するものは、本人は自由に見えても、これは地獄的自由です。主への愛と隣人への愛、ひいては、善と真理への愛に合致するものこそ、本当の自由であり、天的自由です。」³⁰

と述べている。他者への役立ちによる意志が真の自由に通じ、利己心による意志は自由ではないということである。また、この自由のうちにはないと誰一人として自己改革ができなくなってしまうという。

さらに、スウェーデンボルグは、

「人が自由な状態にあることは、不可侵的な神の法です。善と真理、仁愛と信仰は、決して強制によらず、人の自由の中で、植え付けられねばなりません。強制された状態で受け入れても、定着せず、消え去ってしまいます。人を強制しても、本

人の意志には浸透しません。たとえ強制されて行っても、他人の意志によるわけで、自分の意志、自分の自由に戻った途端、消滅していきます。」³¹と述べている。ここから、人の意志は他人から自立した状態で、神によって授かった自由の中で、神の摂理に適った選択を、自分の意志で行使して行くことによって、自分の意志を神の摂理や秩序に合致させようとする行為の度合いにより、その合致の度合いが高ければ高いほど、霊界（天界）での幸福へと到ると結論づけている。

意志の目的が自己の幸福なのか他者の幸福なのか、自然界では、他者の心は感知できないために、他者の行為から他者の本当の心意を理解することはできない。しかし、霊界では感知力が研ぎ澄まされ、スフェア（sphaera）³²が高感度になるという。これはどのようなことかという、

「他の人々と自分を比べて、自らの優秀性を高く評価している人がいました。その習性は、あたかも本性のように、どこに行っても、誰を観察しても、人と話をするときは、自分を見つめるという性格です。最初それが明白でしたが、本人が意識しなくなるほど不明瞭になりました。それにもかかわらず、本人の情愛と思考の一つ一つ、態度や言語の一つ一つの中に支配的に働いていました。

人はこれを他人の中に見ることができます。」³³ということであり、各人はその内面をスフェアとして備えているため、他者のその内面を、自身の研ぎ澄まされた感知力で知ることになる。

この状況を言い換えてみる。自然界で人は名誉、利得、名声、生計の失墜を恐れる。それらが失われるなら豊かな生活ができなくなってしまうからである。そのために、実際に周りの人には、人徳があり、良き市民のように映り、または天使のように見えるときもある。そして社会や隣人に迷惑を及ぼすこともない。迷惑を及ぼせば社会的に罰せられるからである。だが、霊界では、このような場面設定や演技は適用されず、その内面のと通りの自分が顕わになった姿を他者に感知されることになる。これにより、自然界で本人がどんな悪魔だったのか、またはどんな天使だったのかが分かるということであり、それが衆目にさらされるということである。³⁴

4.2 ルソーの道徳的思想

ここまでカントの形而上学である霊界の理論とスウェーデンボルグの霊界見聞録のうち、カントの霊的法則による道徳的世界（霊的世界）に係わりがありそうな箇所を見てきた。

ここでは、従来から指摘されているルソーからの影響を見てみることにしたい。カントへのルソーの影響はどのようなものなのか、そこを窺うことに適した覚書をカント自身が残している。

「私は気立てからしても学者だ。知ることを渴望し、また、ものを知りたいという貪欲な不安にとらわれ、あるいは、一歩進むごとに満足をおぼえもする。一時期、私はこのことのみが人間の名誉を形づくると信じ、無知な賤民を軽蔑した。ルソーがこの私を正道にもたらししてくれた。目のくらんだおごりは消え失せ、私は人間を尊敬することを学んだ。もし、その尊敬が、他のすべての研究に、人間の諸権利を顕揚するという価値をあたえようと信じなかったならば、私は私自身をありきたりの労働者よりずっと無用なものと考えたろう。」³⁵

と述べている。また、カントは、ルソーの『エミール』に読みふけてしまい、日課となっている午後の散歩を失念したという逸話が残っているほどルソーに夢中になったということである。

ルソーは、『エミール』の中で、単なる物質は運動を生み出さないから物質自体は運動の原因ではないという、

「生命のない物体は運動によってのみ動かされるのであって、意志のないところにはほんとうに行動といえるものは存在しない。だからわたしは、なんらかの意志が宇宙を動かし、自然に生命をあたえているものと信じる。」³⁶

と述べ、意志のない物質は運動を起こせないといい、物質が動くためには何らかの意志が働かねばならないから、そこにはある秩序が働いているという。また、

「動く物質はある意志をわたしに示してくれるのだが、一定の法則に従って動く物質はある英知をわたしに示してくれる。だから、そういう存在者が存在するのだ。回転する天空のなかだけでなく、

わたしたちを照らしている太陽のなかにも存在するのだ。わたし自身のうちだけではなく、草をはむ羊、空を飛ぶ小鳥、落ちてくる石、風に吹かれていく木の葉のうちにも存在するのだ。」³⁷
と述べ、「世界は力づよい賢明なある意志によって支配されている」³⁸とルソーは信じ、それが強く感じられるという。

そして、ルソーは、力づよい賢明なある意志である「一般的存在の意識を自己の個別的存在の意識に結びつけることができるのか」³⁹を検討する。そこで、個別的存在の意識を探究し、その個別的存在である人間の本性には二つの根源的なものが見出せると指摘する。

一方は、

「人間を高めて、永遠の真理を研究させ、正義と道徳的な美を愛させ、その観照が賢者の最大の喜びとなる知的な世界にむかわせる。」⁴⁰

他方は、

「人間を低いところへ、自分自身のなかへ連れもどし、官能の支配に、その手先である情念に屈服させ、一方の根源から生まれる感情が人間に感じさせるものをなにもかも情念によってさまたげている」⁴¹

という衝動を自己のなかに見出すという。

ルソーは、相反することではあるのだが、自分が悪いことをしているときには奴隷でもあり、後悔しているときには自由な人間でもあるという二つの状態を感じるという。

ここでの自由について『社会契約論』では、

「人間が真の意味でみずからの主人となるのは、道徳的な自由によってだけである。というのは欲望だけに動かされるのは奴隷の状態であり、みずから定めた法に服従するのが自由だからである」⁴²

と述べる。これは、人間の個別意志は、一般意志に近づこうとする傾向があり、この個別意志と一般意志の一致が道徳的な自由であるということである。

なお、「力強い賢明なある意志」や「一般的存在の意識」は、神のことを指している。この根源的な存在者である神の意志によって、人間は「自由な者として、非物質的な実体によって生命を与えられてい

る」⁴³と述べ、この非物質的な実体を魂と捉える。さらに人間がほんとうに生きているといえるのは「肉体と魂の結合が破れるとき、肉体は分解し、魂は保存される」⁴⁴ときからであり、そのときから魂の生活は肉体の死をまって秩序ある生活が始まるという。ただし、魂の生活がどのようなものか私の悟性は考えることができないとルソーは述べている。

4.3 スウェーデンボルグからの影響

ルソーは、「魂の生活とはどういうものか。また、魂はその本性からいって不滅なのだろうか。わたしの限られた悟性は限界のないものをぜんぜん考えることができない」⁴⁵と述べ、形而上学的な論議は無意味だという。カントにとって不足している経験は形而上学的経験である。だがその経験は、人間の感官には触れず、そのため悟性には考えることもできない。ルソーはまた、「形而上学のたわごとはたった一つでも真理を発見させはしなかったし、それは哲学を不条理なことでいっぱいにしてている」⁴⁶とも述べ、形而上学的論議にたちいていないことから、ルソーの思想的枠組みでは形而上学的世界を描くことができないということになる。

そこで、形而上学に惚れ込み人類の幸福を形而上学に求めるカントは、スウェーデンボルグの霊的世界での経験が必要であり、その経験を自己に取り入れ形而上学的世界を論述したのではなかろうか。

ここで、スウェーデンボルグの霊的世界をあらためて見てみると、人の意志は他から自立した状態で神から授かった自由の中で、神の摂理や秩序に適った選択を、自分の意志で行使して行くことによって、自分の意志を神の摂理や秩序に合致させようとする行為の度合いにより、その合致の度合いが高ければ高いほど、霊界（天界）での幸福へと到るということになる。反対に、神の摂理や秩序に反する意志の選択を行使することは、自ら選択して地獄に赴くことになる。天界を選択し真の自由の中にいるか、地獄を選択し自由の中から離反するかは、自立した状態で意志し自らが選択するのである。これは、ルソーの道徳的思想にも通じるところがある。

また、人は、自然界に生活している時から心の状態によって、霊界でのその心の状態に見合った霊と

いつも繋がっており、その心の状態に見合った霊界の社会に引き付けられるとされる。

さらに、人のスフェアの類似に応じて天界での社会が構成され、一つ一つの社会が秩序と調和を保ち、天界全体も秩序と調和が保たれる。霊界の中での天界は、自分以上に他人の幸福を願う社会であり、内面の心意が公に顕わになる世界でもある。反対に自分のことのみを幸福を願うならば地獄に引き付けられることになるが、ここでも内面の心意は顕わになるという。

次にカントの霊界描写の特徴として、

- ・自然界（物質的世界）と叡知界（非物質的世界）という二世界を構想していること
- ・生命の根源は非物質的存在者であること
- ・人の心は、霊的法則の作用が影響し自己よりも他者への道徳的な配慮が働くこと
- ・人はこの世にいる時から二世界に関係を持ち、道徳的状态に相応しい霊と密接に繋がっていること
- ・人の道徳的心意は、この世では他人には明らかにならないが、あの世ではその状態が顕わになること

を挙げることができる。これは、ルソーの思想的影響だけではなく、スウェーデンボルグの形而上学的経験の影響が反映されている。

つまり、スウェーデンボルグの霊界もカントの霊的法則による道徳的世界もどちらも道徳的倫理的色彩が濃い調和のとれた秩序のある世界ということになるのではないだろうか。カントは『視霊者の夢』の中で、スウェーデンボルグの『天界の秘義』を買い読んだと明言している。ただし、カントは、

「それが私の以前の判断を実証しようとするいは否定しよう、私を規定しようとするいは未決定にしておこうと、それにはかかわりなく、私を教化するような何かを見つける場合には、私はそれを自分の物にする。私の根拠を反駁するような人の判断は、私がそれを最初は自愛の秤り皿に対して、後からその中で私の理由と称するものに対して釣り合わせ、そしてその判断の中に一層大なる実質を見いだした後においては、私の判断である。」(349)

と述べ、スウェーデンボルグの思想によって感化を

受けたカントは、思想的な教化、深い考察を通して、スウェーデンボルグの思想をカント自身の中に取り込むことに成功したのであろう。よって、カントの論理からするとその思想はスウェーデンボルグからの影響もあるのだが、教化を受け判断したからには自分の思想だということになる。

5.おわりに

『視霊者の夢』の中で最も重要な部分でもあり、カント自身の信念の告白としての霊界描写に対して、イギリス伝来の「道徳感情」やルソーの「道徳的な自由」や「私的意志」と「一般的意志」などの思想的枠組みの強い影響であるとの従来からの指摘はある。

しかし、カントの霊界描写の底流にはスウェーデンボルグの思想を垣間見ることができる。自然界(物質的世界)と叡知界(非物質的世界)の二世界、人は心の状態によって、その心の状態に見合った霊的世界の社会に繋がっていること、そして霊界では、自らの道徳的心意が公に顕わになることなどは、スウェーデンボルグの霊界の見聞録のうち天界の記録を基に構想されたのであろう。

批判期以前のカントは、ハイムゼートの指摘どおりルソーの思想とスウェーデンボルグの形而上学的思想の影響を受けている。カントの批判期前の空白期間においては、スウェーデンボルグの霊界見聞録を哲学の思想として構築するために容易ならざる苦悶の日々が続いたのではなかろうか。

学問にとって、経験可能かどうか、その経験が回復可能かどうかによって、学問が成立するか否かがまず問われることとなる。なぜならば、経験できないことは検証できないことであり、データが存在しなければ証明すらできないからである。ゆえにカントは想定からの構想、要請からの構想として霊的法則による道徳的世界を構築している。形而上学的世界であるスウェーデンボルグの思想は、経験することのできない別の世界のことであるために、その思想を取り入れたカント思想は難解な思想になっているのではないだろうか。

また、批判期の萌芽的論述である『視霊者の夢』の中で、カントは、スウェーデンボルグを否定した

論述をしている。だが、カントは、その否定によって、スウェーデンボルグを封印して自身の思想の中に閉じ込めてしまった。そのカントによる封印を解き放ちスウェーデンボルグを再考することより、混沌とした現代を導く一筋の光を見出すことが期待できる。それゆえ、カントをより深く理解するためには、まず、スウェーデンボルグの思想を理解すること、それにより、これまでとは違ったカント思想の解釈の世界が拓がるであろう。

¹ Träume eines Geistersehers, erläutert durch Träume der Metaphysik, 1766

² 『カント全集第3巻 前批判期論集2』(理想社、1974年)本論では『視霊者の夢』からの引用のみはカント・アカデミー版全集第Ⅱ巻のページ数によって示す。

³ 「カントとスウェーデンボルグ」(高橋和夫著、門脇卓爾教授退任記念論集『哲学論考』に収録、学習院大学カント研究会、1995年)

⁴ 「ルソーの枠組みを借りて作られた霊界あるいは叡知界の理論」『理性の不安』(坂部恵著、勁草書房、1976年)112頁。「しかしそれがとくに「私的意志」と「普遍的意志」との関係として考察されるのはルソーの強い影響によるものであろう」『若きカントの思想形成』(浜田義文著、勁草書房、1967年)399頁

⁵ 『カント哲学の形成と形而上学的基础』(H・ハイムゼート著、須田朗・宮武昭訳、未来社、1981年)62頁

⁶ 『カント全集21 書簡1』(岩波書店、2003年)12頁

⁷ 前掲訳書12頁

⁸ 前掲訳書12頁

⁹ 前掲訳書12頁

¹⁰ 前掲書、坂部恵、79頁

¹¹ 前掲訳書、35頁

¹² 前掲訳書、35頁

¹³ 前掲訳書、37頁

¹⁴ 前掲訳書、37-38頁

¹⁵ 前掲訳書、38頁

¹⁶ 前掲訳書、38頁

¹⁷ 前掲訳書、38頁

¹⁸ 前掲訳書、40頁

¹⁹ 前掲訳書、41頁

²⁰ 前掲訳書、41頁

²¹ 前掲書、坂部恵、83-84頁

²² 『巨人・スウェーデンボルグ伝』(サイン・トクスヴィグ著、今村光一訳、徳間書店、1988年)331頁、『スウェーデンボルグの思想』(高橋和夫著、講談社、1995年)89頁

²³ 前掲書、浜田義文、394-5頁

²⁴ 前掲訳書、書簡1、38頁

²⁵ 前掲書、坂部恵、105-114頁「霊の共同体」。前掲書、浜田義文、394-404頁「英知界の構想」

²⁶ 前掲書、坂部恵、105-114頁「霊の共同体」。前掲書、浜田義文、394-404頁「英知界の構想」

²⁷ 『天界の秘義』(スウェーデンボルグ著、長島達也訳、アルカナ出版、2001年-)452(著者の記した小節の番号を示す。)

²⁸ 前掲訳書、454

²⁹ 前掲訳書、1277

³⁰ 前掲訳書、2870

³¹ 前掲訳書、5854

³² 各人独自の霊的な圏域、類似的にはオーラ。各個人は、スフェアによって自らの周囲に霊的事物を算出する。心が抱く想念や感情がスフェアの中に表出し、霊の眼前に展開する霊的な顕現物である。『スウェーデンボルグの「天界と地獄」』高橋和夫著、PHP研究所、2008年、179-182頁)

³³ 前掲訳書、1505

³⁴ 前掲訳書、6495

³⁵ 『カント』(坂部恵著、講談社、2001年)107頁、128頁

³⁶ 『エミール(中)』(ルソー著、今野一雄訳、岩波書店、2007年)176頁

³⁷ 前掲訳書、180頁

³⁸ 前掲訳書、185頁

³⁹ 前掲訳書、188頁

⁴⁰ 前掲訳書、190頁

⁴¹ 前掲訳書、190頁

⁴² 『社会契約論』(ルソー著、中山元訳、光文社、2008年)50-51頁

⁴³ 前掲訳書、今野一雄、196頁

⁴⁴ 前掲訳書、今野一雄、203頁

⁴⁵ 前掲訳書、今野一雄、203頁

⁴⁶ 前掲訳書、今野一雄、178頁

(Received:September 30,2013)

(Issued in internet Edition:November 1,2013)